

唐傘

古くから刷毛に縁のあるものの一つに傘がある。張刷毛と云うのは刷毛業者のつけた呼びかたで傘を貼る時に必ず用いる。これも古くから使われて居つた様である。

傘の起源は文献で（日本書記）欽明記に

（十三年冬十月百濟聖明王（中略）献釈迦金銅像一鷗幡蓋若干）

とあるのが最初のやうで大寶養老の頃から専ら用いられたといわれている。

（職員令）に

（主殿寮頭掌供御輿蓋笠織扇）

云々と見える中の蓋は仏家の蓋の如きもの、笠は竹笠、菅笠の類で雨を防ぎ暑を遮ぎるため頭にかぶる具、織は日傘の類で絹又は紙をもつてはつたもので後世の堅傘はその遺風であるとのこと。傘が出来てから象形により傘の字を造り隋唐で多く用いたことから我国の日常の文字となつたといわれる。

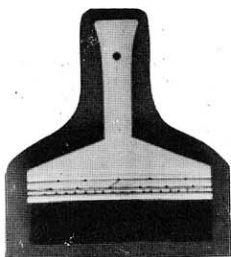
（万葉集）に

久堅乃。ひさかたの天婦月乎。あめゆづきを綱爾刺。つなにし我大王者。わがみさまは蓋爾為有。きみがさしあり

註 皇子を仰見て蓋を月に見なしたる歌

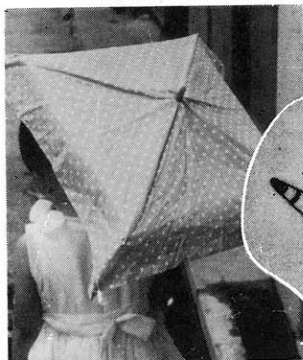
蓋は綱をつけたるものなり

今の比は四角にて、僧家に用ゆる蓋のさまなるべく見ゆれど月に譬しからは、古へは円かりしなるべし。



傘ばり用刷毛

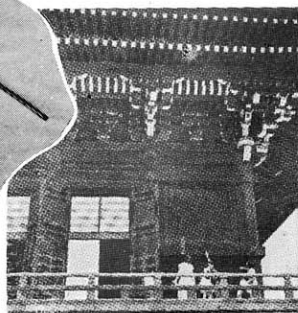
唐の青竜寺で灌頂壇に入る空海



傘の復古調



宮川長春画、春駒より写す



知恩院本堂南庇の忘れ傘



(左) 江戸時代の傘丁ちんの看板

(右) 南海の和傘風景



とある。

語源は笠は被るもの、傘は差しかざすもので、古えには笠のみあつて傘はなかつたので在来のものに対して唐から来たためにカラカサという説と其の外にも種々の説があるようである。しかし最も古くカラカサが大笠であつた時代は後世の如く開閉自在のものでなく、ひらいたままのものであつたという

赤紫綾御蓋  
あかむらさきあやのりしずみかさ

菅御笠  
すげのおんかき

は共に皇大神宮御料にみる事が出来(絹傘ぬいがさ)は(奈良朝)時代のものを(東京博物館)にみる事が出来る。

日傘は非常に古くからあつて平安朝のころすでに貴族や高僧などがこれを用いていたと(事物起源考)も伝えているがこれは自分でさすのではなく、さしかけてくれたのである。

自分でさしだしたのは徳川時代儒学者や医者がさしはじめ、それから宝暦、明和の頃から婦女子が専ら用いるようになり爾来使う人の階級や職業などによつて優美なものなど、いろいろな傘が生れて来たのである。

我が国で古く傘の作られたのは天平(千二百年位前)の頃、支那の帰化人が近江の(ツヅラ)と云う所で大量に作つたといわれているが帰化族が山城に定住したのは古いことであり、葛野かどのの地に朝鮮から移住していた帰化人が欽明天皇の時代(約千四百余年前)すでに七千五百三戸におよんでいたといわれ、各種技術者がおつたので傘もこれら帰化人によつて作り始められたものであつて

国内各所で作られている傘は皆この流れをくんで居るものが多いといわれている。

傘の事は古くは因果経の中にも画かれてをり

(落窪物語)に

おほがさ二人さして

とあり。

(枕の草紙)にも

からかさをさしたるに風のいたく吹きて……………

とある。

桃山時代の風俗画に見られる日傘には、彩色して花文様などが描かれており意匠にも意をもちいていた事が知られ、古くからおんば日傘の言葉もあるが、日傘が一般庶民のものになったのはずつと後のことであろう。

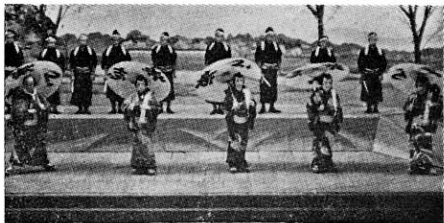
(更級日記) 足柄山のくだりに

……あそび女三人いづくよりともなく出で来たり、五十許なる一人、二十許なる、十四、五なるとあり、庵の前からかさをささせてすへたり、をのこども、火をともして見れば……

とあり、このころ遊女はからかさを背負つて歩き、客があるとそれをひろげて、その下で歌つたようで、傘の称の古からあつた事が知られると、ともにもうこの頃(約千年位前か)は開閉自在の傘のあつたことが知られる。

この遊女の呼名は、古くはうかれめといひ万葉集では遊行女婦と書かれているが、平安末期から白拍子、この時代くづつという遊女がいた、その他辻君、立君、夜鷹、など街路で男の袖を引くもの、徳川期にかけては大、天神、平夜、端女郎、湯女、散茶女郎、振袖新造などがみな女郎と呼ばれるようになったが、それは驕る平家

白浪五人男勢ぞろい

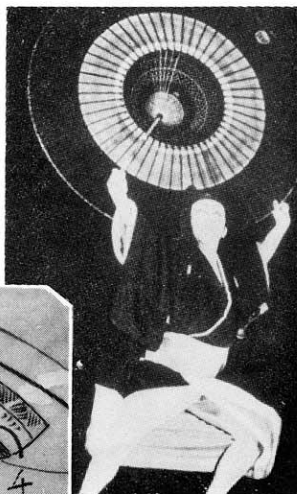


番傘



忍者恋曲者の滝夜叉姫

助六



千鳥がけ



らくがき



北野天満宮、梅花祭

る場合に備えた事に始まり近郊の海南にも元禄年間より数軒の製造業者が出来（現在紀勢西線海南駅前）明治以後次第に隆盛に赴き現在に到つたのである。

この海南駅から野上電鉄が野上谷の奥へ通つており、谷の両側の山の斜面にはブラシ原料のシュロの木がたくさん植えられているが、野上谷はシュロの全国生産の八割をしめシュロ製産地として徳川時代から知られているところである。（ブラシ欄参照）

岐阜の傘は江戸時代播州明石の城主がここに転勤になつて来たが極めて御手元不如意であつたので近くの竹や油や紙を使って家臣に傘を作らせたのがそもその始まりであつたといわれ、この外にも、三重、山形やその他各所で生産されており現今にては日傘の輸出なども盛んに行われている。

大和の国郡山は柳沢藩主の城下町でありその昔より藩士が傘提灯の仕事をして居つたものであろうか、今でも傘提灯の製作がなされておりこれら傘提灯の仕事をする家の表札に（士族 何 某）と書かれておることが多いのも面白い。

講談でおなじみの荒木又右衛門のあだ討と伊賀流忍術で知られる伊賀（三重県）の上野も和傘が名物であるがその起りは、織田信長がたおれ豊臣秀吉が死んで天下は徳川家康の手中におさまろうとしたころ家康は、藤堂高虎を、伊賀、伊勢の領主とし、伊賀の上野城に五層の天守閣が出来あがつたのが慶長十七年九月二日という、この天守閣が突然突風がおこつたおれ、一人の棟梁をのこして、ほかの大工は全部材木の下じきになつて死んでしまつた。生きのこつた棟梁は、腰にさしていた傘をひろげて、城から飛おりたのでたすかつた、棟梁はこの不思議な恩恵に感じ、いのちのたすかつた和傘づくりを始めたが、これが伊賀の和がさのはじまりだといわれる。

る場合に備えた事に始まり近郊の海南にも元禄年間より数軒の製造業者が出来（現在紀勢西線海南駅前）明治以後次第に隆盛に赴き現在に到つたのである。

この海南駅から野上電鉄が野上谷の奥へ通つており、谷の両側の山の斜面にはブラシ原料のシュロの木がたくさん植えられているが、野上谷はシュロの全国生産の八割をしめシュロ製産地として徳川時代から知られているところである。（ブラシ欄参照）

岐阜の傘は江戸時代播州明石の城主がここに転勤になつて来たが極めて御手元不如意であつたので近くの竹や油や紙を使って家臣に傘を作らせたのがそもその始まりであつたといわれ、この外にも、三重、山形やその他各所で生産されており現今にては日傘の輸出なども盛んに行われている。

大和の国郡山は柳沢藩主の城下町でありその昔より藩士が傘提灯の仕事をして居つたものであろうか、今でも傘提灯の製作がなされておりこれら傘提灯の仕事をする家の表札に（士族 何 某）と書かれておることが多いのも面白い。

講談でおなじみの荒木又右衛門のあだ討と伊賀流忍術で知られる伊賀（三重県）の上野も和傘が名物であるがその起りは、織田信長がたおれ豊臣秀吉が死んで天下は徳川家康の手中におさまろうとしたころ家康は、藤堂高虎を、伊賀、伊勢の領主とし、伊賀の上野城に五層の天守閣が出来あがつたのが慶長十七年九月二日という、この天守閣が突然突風がおこつたおれ、一人の棟梁をのこして、ほかの大工は全部材木の下じきになつて死んでしまつた。生きのこつた棟梁は、腰にさしていた傘をひろげて、城から飛おりたのでたすかつた、棟梁はこの不思議な恩恵に感じ、いのちのたすかつた和傘づくりを始めたが、これが伊賀の和がさのはじまりだといわれる。



上段右(佐渡おけさ、あみ笠)  
 上段左(島原七万石踊り、あみ笠)  
 下段右(市女笠)  
 下段左(笠)





天正九年伊賀の地は織田信長の侵略にあり、忍者、百地三太夫も石川五右衛門も消息をたつたといわれるが、忍者の一人服部半蔵は後にお庭番という穩密として家康に抱えられて江戸に住み、江戸城の半蔵門は、いざという時半蔵が守るという意味でつけられたともいう。

藤堂高虎は築城とともに、城下の神社や民家に迄も、戦略的な防備計画をしいた。そのため幕末迄、城下町の半数以上が武士であつたので明治維新のときは失業武士が氾濫し、これらが和がさづくりやその他の内職に転向し、そのため和傘の製産もさかんになり、いまでは昔の伊賀の忍者にかわつて名産になつていくという。

かような各地の傘からかさの製造は太平の世となつて藩士に支給する禄の都合上領主の一つの政策の遺物であつたので、もともと武士は戦闘要員であるので、太平が続けば職場転換してよい筈なのであるが、そこは土農工商という身分制度の蔽として存在する時代のことだけに容易にできる事でない。主家の側からも功勞のあつた人達の子孫を路頭に迷わすこともならず、どの藩も多くの家臣を抱えて、財政難に苦しんでいた。江戸も末期に近づけば近づくほど俸禄の不足と物価高に苦しみ、上級の武士でさえ扶持米を現金に換えてくれる札差から何年も先の扶持米の分まで前借りするという状態、まして下級武士は食はねど高楊子どころではない、体面だのなんのといつていたら顎が干上つてしまう。水戸藩の如き約一〇〇〇人の武士がいたが、その中の一〇〇石以下の七〇〇人には正式に内職が許されていたといわれる。そこで傘や提灯や扇の骨けづりや紙はりなどは下級武士やその内儀たちの悲しい内職であつたので、一般庶民は武士のふだんの権柄に対して傘ざむらい、提灯ざむらいなどと後指さして日頃のうつぶんをひそかにはらしていたのである。

浄土宗の総本山である京都の知恩院には有名な忘れ傘がある。

京洛きつての靈場華頂山智恩院はわが国浄土宗の元祖法然上人によつて開かれた念仏道場であり、上人の遺骸が安らかに眠るところ、東山三十六峯の焦点で三絃の（京の四季）の歌曲になじみ深いところ、三門勅額（華頂山）は豊元天皇の宸翰、本堂は間口二十四間半、奥行十九間半入母屋造本瓦葺、寛永十六年徳川三代將軍家光によつて再建された京都における有数の大建築であり浄土教団の本堂として代表的様式を誇つている。この智恩院史蹟や伽藍を尋ねる修学旅行団や観光客も、巡拝する国宝の古写経や工芸品また豪華な障壁画の数々は忘れても印象的でいつまでも記憶に残るのが（驚張りの廊下）と（忘れ傘）であるといわれている。

蛇目傘は元禄時代から現われ、太平の華美淫蕩の嗜好にあり、中央、青土佐紙、端も周りも同紙、中間は白張紙、是れを蛇の目傘といい主として婦人に用いられた。

蛇の目傘の一種に奴やつこというのがあるが奴蛇の目は、蛇の目傘よりふちの黒い部分の浅いものをいう。

傘は用いる場面によつては誠に風情のあるもので、絵画、演劇などで傘を持つている事によつて一層おもむき添えていると思うことがあり、錦絵の美人画にこの傘をあつかつたものが多く歌舞伎劇にも傘をもつ場面が少なくないが。

助六由縁江戸桜

助 六

忍夜恋曲物

滝 夜 又

村井長庵巧破傘

赤羽根橋の場

青砥稿花紅採画

稻瀬川勢揃ひ（白浪五人男）

などが代表的ともいふべきか。

(文政八年作)

で刷毛を使つて傘を貼る場面があるが、昔武士の内職であつた事を示すかのように、現今も変りなく演出されている。

傘は俄雨などの時、よく貸し借りするものであつて、返す時には乾かして返す事が礼儀であるが、借りて来ても、四、五日も雨が続きと乾かす折もないため返す事も忘れる場合もあるので借りる時に、(悪い傘でよいから)と云う様な言葉も使われ、貸す方でも(わるいもの故返さなくともよい)と云う様な工合で貸し借りしたもので其角の句に(一本足の古傘の化物に諷し)

化けそうな傘を借りてく俄雨

というのがあり、これらの情景をあらわしているようである。

また俄雨にどこで傘を借りようか

近づきをかながえて居る雨やどり

借りては来たものの、なが雨になれば先方も困り自分も乾すひまがたすかると考えたか。

からかさしづくをしづくで返す律義者

などはまだよい方で

やぶれ傘かま五、六本あるずるいうち

という横着者もある。また

ふきぶりに人間をのむ蛇の目がさ

と大嵐のふきぶりや

からかさ  
傘も二人でさせば恋になり

降るは春雨であろうか、なまめかしいものなど、傘をあつかい、事実を洒落滑稽に諷刺したのもたくさんある。壁に書かれた相合傘のらくがきも

(小唄)になれば

なつの雨しのぎし軒の白壁に憎やうわさをまざまざと

相合傘に書いた文字見てはほころぶ片えくぼ

と風情あるものになる。

長唄の名曲(汐汲)には傘づくしがあり、小唄には「からかさの」があり、

からかさの骨はばらばら紙や破れても

離れまいぞへ千鳥掛

とある。

徳川將軍家の重要な慶事、たとえば毎年三月一日の年賀答礼をかねた勅使の下向、および將軍宣下、昇任、若君誕生、加冠、成婚などに際して能楽を江戸城内に開催し、これを公衆に見物させ、酒や菓子や、それにおもしろい事に傘をあたえたもので、傘をあたえたのは何の意味か不明であるが、この日は、ほとんど無礼講にひとしく、たいいていの事は聞き流しとして御答うたまへなく、江戸ッ子もこの時ばかりと聞くにたえぬような悪口雑言の野次

をとばし日ごろの圧制に対する溜飲をさげたといい。これは寛永十八年九月より始まつたもので当時うたわれたものに

有がたさ御庭一杯江戸の町

一日は民も登城の太郎冠者

君の恵みぞ有がたき傘をさげ

雨やどりするに及ばぬ有難さ

などがある。

天保年間幕府の極端な風俗矯正方針は、各地にも模倣せられ、諸大名もその領内に於て、幕府の意を迎えんがため常識はづれのことまで行い、その一事に尾張地方では、百姓は雨天の時も傘、下駄を用ゆべからずという達しを出している。

傘は生活必需品であるので明治時代支那人が、たくさん傘を背負つて農、漁村といわず都会といわず売り歩いておつた事が老人の記憶には残つてゐる事と思う。

また江戸の（洒落本）辰巳之園に

・・・揚枝屋娘の美に気をとられ、傘の沢山なるにきやうをさまし・・・

とあり茅場町薬師堂の門前には傘屋が多くあつたことをつたえている。

薬師は瑠璃光如来を祭るので

瑠璃色の日傘も出来る薬師前

と茅場町の傘屋をよんだ狂句がある。

江戸時代から日本橋に「照り降り町」という町名があり、これは傘屋と下駄屋の町であつたので、この名がつけられたという。

江戸時代には破れ傘の油紙をはがして獣肉の包紙に利用した。現今のように耐油紙のない時代であるから、破傘を買い集めた屑屋は、油紙をはがしてその紙を肉屋に売つたのである。

川柳に

猪を包むようなを貸してやり

とある。

破れ傘の利用は油紙だけでなく竹の部分も利用される。

竹は四十八節<sup>むち</sup>あつて子竹が必ず親竹より長くのびるので目出度い植物として初春を寿ほぐ門松に使われ、其外、竹の用途は極めて広汎にわたるが、如何に乾燥するも長さが絶対に縮まぬ特質を利しモノサシに作られる。

傘としての役目を果した古傘の竹骨は、銭湯の流し場の板敷の時代、その板敷の洗条に利用し、また刷毛の耳(両脇)に打込む竹釘は、古傘の骨で作るのであるが、これは古竹の乾燥度と小割されている点に先人が着目したものであろう。

昔天蓋屋というのがあつた、今言う葬儀屋であつて先づ棺桶を始め、造り花、位牌、人夫の周旋等葬式一切の用達をしたのであるが、昔の葬式はその行列に天蓋が一番先に立ち最も目につく物であるから天蓋屋の称呼が起つたのであろうと言われている。

朱の大傘を立てて行く梅花祭が北野天満宮で菅公の祥月命日の二月二十五日に行われる。鳥羽天皇(七十四代)の御世に始まり今につづく重要な行事で、神靈に梅の花をさした供物をささげるが、梅花祭の呼びものは神苑での野点である。ほころびそめた菅公ゆかりの梅の花かげに赤いもうせんを敷き、朱傘を立て、京都でも地味と古風を看板に「渋さ」で知られる地もと上七軒の美しい芸妓総出仕で、立ち居もひとしおあでやかにお点前を見せる、まことに落着いた味である、土地の人はこの朱傘を太閤傘と呼んでいる。

この朱傘を太閤傘と呼ぶのは豊臣秀吉の北野の大茶の湯の故事によるものであろうか。天正十六年の秋、豊臣秀吉が山城国北野に開きたる茶の湯会について

その頃、その道に名ある千の宗易、時めきしに、彼に学ぶものは数知れず、上の好事、下従ふ習になむ、その様いわずとも知るべし、北野の御社のめぐり、馬場の左右、松の木下、梅の木陰、岩のはざま、千尋の陰などに茶屋のあるべき所をばかこひ、志ある人人に与えて、その巧にしたがひ、茶屋造り並べたり、遠き国の人まで、この道にすけるは、我も我もと上り集りぬれば、凡そ、千人に余れり、その日は、終日、ののしりとよみて、会終れば、心をつくしし工も、皆、取り払ひけり、後が後まで、きたのの大茶の湯とて人の口ずさみに先だちける。

とある。

大傘はこの外各所で様々な催しもの時などに用いられ、貴人、神宮、僧侶などにさしかざし、花魁道中にも使われ、はては神社仏閣の鳩の豆売りなど露天商人も用い、この大傘を立てならべての商ない風景は天幕張りとは違つたおちついた古典の味が感じられる。

昭和二十七年に無形文化財に指定された因幡の傘踊りには一つの物語りがある。徳川時代の末ごろ、鳥取県岩美郡宇倍野村に五郎作という老農が住んでいた。ある年の夏、大へんな陽照ひざりにみまわれ村の水田はわれ、畑の野菜類はみんな首をおつて枯草のようになつたとき、老農五郎作は冠笠をかむり、連日にわたつて必死の形相で雨乞いのおどりをくるつたようにおこなつて祈りつづけた。この甲斐あつてか数日後に、みごとな大雨が降りそそぎ、そのために大かんばつをまぬがれることが出来た。村民は大いによこんだが、あわれ五郎作は心身の無理がたたつて不帰の客となつてしまつた。そこで村民は五郎作の霊をなぐさめるため、その年のお盆に老若男女を問わず、冠笠に柄をつけて供養踊りをおこなつたのがおこりだとなつたといわれている。

この傘踊りはおどりの優美さはなく、青年が白鉢巻にたすきをかけ、脚絆まきはんに草鞋わらじばきのいでたちで柄一間、直径三尺の鈴のついた大花傘をくるくる器用にさばき、歌い手の唄にあわせておどりぬく、剣舞のようないさまい踊りである。

笠の種類としては、平安朝時代の市女笠をはじめ、桧笠、高野笠、みこ笠、六部笠、竹皮笠、山詣笠、三度笠、編笠、しのび笠、綾る笠、陳笠、る笠（天蓋）、まんじう笠、菅笠、花笠、塗笠などがあり、それぞれの特長を持つのであるが、今は時代の推移と共に、歴史の遺物として忘れられているものや、現在も実用に、また祭礼や地方色豊かな郷土民謡の踊りに風情をそえるなど重要な役割を果たしているものが国内いたるところにあり、九州鹿児島には勇壮な傘やきの行事がある。

昔、江戸吉原にあみ笠茶屋というのがあり、吉原の廓へ通つてくるものに編笠を貸した。浅草泥町（今の田町）の茶屋で、銭百文を出して借り、帰りに笠を返せば銭六十四文を返してくれる、つまり保証金を預るわけで



ある、編笠茶屋では懸髭かひげという耳からさげるつけひげを貸し、またこの髭を売り歩くものもあつて遊里通いのものが利用した。京都の島原遊廓にも江戸にならつて編笠茶屋ができたというが島原は天正年間に二条の南、万里までの小路（柳馬場）通りの辺りに栄えていたのが、慶長年間にいまの西本願寺の中間にあたる六条三筋町に移り、さらに寛永十八年に今の地に移したものだ。時あたかも肥前島原の乱が起つたので、世の人は、この廓に遊ぶを賊の城廓を攻撃するにたとえたから、島原の名が生まれたという。京都下京区丹波街道の南方にある遊廓であった。江戸吉原に見返り柳があるが京都島原には、でくちの柳がある、江戸吉原の見返り柳は、清元（北州）に

とうたわれているが京都島原では俗曲出口の柳

とある。二度のつとめを島原の、よいさよ、でぐちの柳ふりわけて、恋と義理との、よいさよ、ふたへ帯とある。

吉原、島原とも酔客は編笠で通つたであろうが、享保頃より元文にいたつて編笠茶屋はなくなつてしまつたといわれ、この貸笠には焼印がおしてあつたものであろうか、焼印笠の名称で呼ばれていた。

俗曲、笠やさんがへり

三枚がたにも得乗らいで、やきいんあみがさうちかさし

丹波口にてけつまづいて・・・

とあり、大坂の廓について難波鑑なんばかがみに

若きものは衣紋ひきつくろひ、編笠をかぶり、羽織をかつきて、しのぶすがたもいとおかし、・・・

とある。

色里かよいも中々賑にぎわつたものであろうか、江戸時代の作家井原西鶴の（世間胸算用）に

都の遊び所島原の入口、小唄にうたう朱雀しゆくわくの細道という野辺なり、秋の田のみのる折ふし、諸鳥をおどすために案山子あかかしをこしらへ、古き編笠を着せ、竹杖をつかせ置きしに鳶鳥とびからすも不断焼印の大編笠を見つけて、これも供なしの大尽と思ひ、すこしも驚かず、後には笠の上にもとまり案山子あかかしを粹すいごかしに合せける、

とあるほどである。

あみ笠にても菅笠にても前さがりに顔の見えぬようにかぶることを伏笠という

ふせ笠や遅おそふてうるさき人しぐれ

歌舞伎劇世話狂言、文政六年、鶴谷南北作

浮世柄うきよづかひ比翼ひよく稲妻いなづま（鞆たもと当あて）仲の町の場で名古山三のせりふに

面おもてを包む目関笠、取つて貴殿の御面相

とある目関笠は目の細密にして透き間なきものをいい、大津絵の藤娘のかぶれるものが、つま折れ笠である。

尾張国に笠寺がある、正しくは転輪山笠覆寺、本尊は十一面観音、聖武天皇時代の創建、昔本堂頽破して本尊の大雨の中に濡れいたりしを、ある長者の娘の見かねておのが笠をさしかけいたり、という故事あるところ。今も本尊は笠を覆ってある。東海道名所記に、転輪山菴福寺は観音の霊場なり、笠をめしたる観音の木像おわします、故に世に笠寺という、三十三年毎に開帳あり。

とある。

芭蕉の句に

かさでらやもらぬ宿も春の雨

商人や飲食業者などが（〇〇すし）とか（〇〇屋酒店）などと番傘に筆太に書いて貸傘として自家の広告を兼ねた時代もあり一般家庭でも何本かの傘を必ずととのえてあつたものである。この番傘を一名大黒傘とも呼んでいたのが、歌舞伎の世話狂言

梅雨小袖昔八丈 永代橋の場で髪結新三のせりふに

これよく聞けよ、普段は帳場を廻りの髪結、いわば得意の事だから、汝がような間抜け野郎でも、やれ忠七さんだとか、番頭さんとか、上手を使つて出入をするも、一銭職と昔から、下つた稼業の世渡りに、ニコニコ笑つた大黒の口をつぼめたからかさも、並んでさして来たからは相合傘の五分と五分だ、ろくろの様な首をして、お熊がまつてゐようと思ひ、雨のゆかりにしつぽりと、濡るる心で帰るのを、そつちが娘にふりつけられ、はじきにされた口惜しんぼに、柄のねえ所へ柄を上げて、油紙へ火の附く様に、べらべら御託をぬかしやがりやア、こつちも男の意地づくに、破れかぶれとなるまでも、覚えがねえと白張の、しらを切つたる番傘で、汝がかほそい其の体へ、べつたり印を付けてやらア

とあつてこれは番傘でなければ芝居にならぬが、現今は殆ど洋傘（こうもり）にかわつて仕舞つた。

洋傘は万延元年アメリカに行つた遣米使節団の一人木村摂津守嘉喜が買つて帰つたのが、わが国に洋傘の来たはじめてあつて明治初期には紳士の持物として特に写真を写す場合には態々洋傘を持つて写し洋傘のない時には

借り物までして写真を写したものであると（博物誌）が伝えている。

当時洋傘を持つことは男女共に文明開化の象徴で、男も女も、昼夜寒暑の別なく、常に持ち歩くことがはやり、黒紋付に袴の場合でも、山高帽に黒靴、それに洋傘を持つて歩くのが紳士の服装であつた。

もつともこの頃、東京の文明開化のありさまを見物に出掛けてくるお上りさん達は、三月のひな段にかけるような赤い毛布を、江戸時代の合羽のように肩から掛けていた。今に残る赤ゲットの言葉の所以であるが、当時としてはこれがまたハイカラな風俗と想われていたのである。

洋傘の流行のため輸入されていたその洋傘も今はアメリカへ輸出している。

傘の生産には昔から刷毛の使われて居つた事は当然であつて、その使われた年代も慶長―天文の頃は確定的であろうが、或は天平（千二百年位前）の頃から使われて居つたのではないかという事も推定されるのである。

傘を貼るのに用いる糊はわらび粉糊で貼つたものであり、また傘貼りに用いる刷毛は刷毛業者は張刷毛と呼んで居るが巾五寸（昔はこれを六寸と呼んでいた）で表具師の使う糊刷毛より厚さは薄く、毛の長さ一寸一分の柄の形は（いちよう）形の本熊毛で作つたものが最も使いよいとされている。